

至誠

明治神宮武道場
至誠館 館長 荒谷 卓

今回は武道が求める「強さの質」について考えていきたい。

例えば、プロ・スポーツゲームの選手たちは、決められた日時にゲーム設備が整った場所で最高のパフォーマンスを発揮できるような身体と道具のコンディショニングをすることに主眼を置き、あくまでゲームマツチに勝利するための実力を養成することを日々の生業としている。

つまり、スポーツ選手が求める「強さ」とは、予定したときと場所で最高のパフォーマンスが出来るコンディショニング下の「強さ」である。

したがって、その前提とするコンディショニングが大きく崩れる様な事態、すなわち怪我や病気などに見舞われた場合には、彼らは試合に出場するのを辞めてしまふ。

これとは対極的に、武道における「強さ」とは、最悪の時と場所でも発揮できる力を養うというところに主眼が置かれている。たとえ病気になるうが、手足が使えない

なくなつたとしても力を発揮するためにはどうしたらいいのか、ということを探求する。それが武道で言うところの「強さ」の本質である。

また、環境も不問である。屋内外、酷暑酷暑、昼夜、雨風等関わりなく如何なる時と場所においても、発揮できる「強さ」でなくてはならない。

この全く異質の「強さ」のどちらを求めたのかによって、力の探究・養成のプロセスは大きく変わってくる。

実は国の制度や政策なども、同じような視点で比較が可能である。何でもベストの環境を整え、ベストコンディショニング下の力を目指すコンセプトやプロセスを採る場合と、劣悪な状況でも組織やシステムが瓦解せず、一定の成長が持続出来る力を生み出すコンセプトを採るのでは、おのずと制度設計が違ってくるからである。

前者のコンセプトで作られた強さは、未曾有の事態とか不測の状況では力になら

ない。後者のコンセプトで作られた力は、人災天災等さまざまなリスクの中でも一定の活動を継続することが出来、さらにその中でも成長発展出来る様な実力を有する。個人レベルでも、社会レベルでも国家レベルでも、制度設計の段階からこのようなコンセプトを持つていれば、タフで生存性の高い仕組みと実力が形成出来るはずである。

そもそも、実社会でベスト・コンディショニングを常に構築しながら歩んでいける人、社会や国家は、実質的には非常に限られている。

特に競争原理の働く環境下では、勝者がルール・メーカーとなり、常に自分に有利な環境を作ろうとするため、追従するものは、勝者が決めたルール・ボードへの適合に四苦八苦して、実力を出すことが難しい。

こうした観点から諸外国を見回してみると、自国にとつてのベスト・コンディショニングを常に構築しながら競争しているというスタンスに立っているのは、厳密には米国の

例えば日中・日韓関係で問題が生じると、常に日本は悪者として報じられていた。米

国に暮らしていたときも同じ。そもそも、米国のメディアが日本を取り上げること自体が極めて少ないのだが、歴史問題などで周辺国との問題が生じると、異常なまでの日本非難が巻き起こる。そもそも、日本人がいう歴史認識の問題は、そもそも米

国発なのだから当然といえば当然である。

ノルウェーの彼は、日本人の自己を犠牲にしてまで他者のために尽くそうとする崇高な精神と、政治的な孤立化のギャップはどこから来るのか、と首をかしげていた。

その原因の一つが、ここで議論している「強さ」の探究の仕方であると筆者は考えている。

日本人の一般国民は、リスクに非常にタフな文化の中で生きていて、その視点から見れば世界に類を見ない程の強さを発揮しているのにもかかわらず、政治レベルでは米国的な競争力を発揮できないう状況に陥っているのだ。

米国的強さは、トップでなくてはできない強さであり、そしてそこに米国の脆弱性が内包されているにもかかわらず、米国的なものを盲目的に目指してしまっている。

我が国本来の武道的な力の使い方を忘れてしまい、常にゲームマッチのような世界で勝利しなくてはならない、という衝動に駆られるが故に、ベスト・コンディショニングでなく場合の事態から常に目をそむけて生きているとも言える。

みであり、その他の国は、現在の自国の限界と可能性を認識した上で、虎視眈々と将来を見据えたタフな政策を進めている。

ところが日本は米国的なやり方を自国の政策にそのまま採りこもうという姿勢が強く、米国の決めたルールの中でいい成績を取めることばかり考え、そのためのベスト・コンディショニングの整備を主要な政策としてきた。

しかしこれは極めて危険かつ脆弱性の高い選択である。スポーツの例で言うと、オリンピックのメダリストといえども、ゲームのルールが変わると、「最高度の力」が出せなくなる。そうなたたんと、普通の人以上に生きる力が無い状態にまで転落する場合さえある。

冷戦時の日本の経済力は、まさに良い例である。対ソ戦略上、米国が支援してく

れる環境下での「経済力」は、国際秩序が変わった今、同じコンセプトで再びメダル台を狙うことなどできない。

経済が悪くなるということも、ショック療法的に使用しているだけで、本当に悪くなった時のための政策は準備していない。

これからは企業でも国家でも危機管理、リスク管理が大事だと言われてはいるものの、それは単に付属的な事柄としか見られていない。日本では余裕があれば危機管理もやつておいた方がいい、といったレベルでしか捉えられていないが、本質的に逆であり、リスクのある中でも生き延びていく

る、最悪の条件下でも持続的に発展していくことが出来ることをメインのコンセプトに置いた政策を採るべきである。

市場の他律的ルールに身を置いて、国家としての政策を決め、自身で決定的でない条件に依存してしまつては、そうしたルールがなくなつたり、その前提条件が変えられたりした場合に壊滅的な打撃を受けてしまふ。日米同盟が機能することを前提として組み立てられた防衛政策なども同様に極めて脆弱である。これはハワイトハウスや米議会の意志で、日本の運命が左右されることを意味するからである。

当面する競争主義の世界で生き残ろうとするならば、仮にリーマン・ショックをはるかに凌ぐ経済危機が生じても生き残れる、日米同盟がなくなつても自国を自らの手で防衛出来るような体制を構築することが重要である。

これからの国内外情勢の大激変を見据え、ベスト・コンディショニングを前提にした力を求めるのではなく、最悪の事態でも対応可能なリスクに強い実力を備えることに、日本国家は目を向けるべきである。

しかし、日本はいまだに、日米関係への過信と、妙な大意識を強く持つており、国際社会のルール作りを出来る政治力がないにもかかわらず、「ベスト・コンディショニング」さえ創出できれば、もう一度経済競争に勝てると思ひ込んでいるようだ。

どのような強さを探求すべきなのかをまずしっかりと個人レベルでも国家レベルでも自覚すべきである。

最悪の事態でも発揮できる真の実力をつけることを目指せ

日本人が武道を通じて探求してきた力、強さとは、最悪の状況でも意志を貫徹しうる強さである。

現在の自由競争、市場的な発想は、まさにベストのベストを探求していく方法の典型であるが、「市場が健全に機能し、ベストなコンディショニングで平等に競争できる」という条件が守られるとは限らない。誰も管理できていない市場のバランスが崩れたとき、その自由競争原理は、自由競争のネガティブな側面が露骨に出てくる仕組みであることを忘れてはならない。つまり、勝者が自己を保全するため他者を排除する自由が正当化され、強烈な独裁的強制力として現れる状況だ。

日本のような先進中流国家は、市場の醜い面が極度に達しないように努力するとともに、そうなった時にでも国家国民を保全できる力を準備しておく必要がある。

ノルウェーの知人が日本に数ヶ月滞在し、「相手のことを自分のことのように思

い気遣う」日本のすばらしい文化が心に残つたという。ひとつの戦いでもある武術の稽古においてさえ、日本人は相手にたいする心遣いを忘れない。生活、仕事、日常の万事において、人のために心を尽くす。そうした日本文化を直接体験して感銘を受けたのだ。

彼によれば、欧州でも、そうした心を人々は持つてはいるが、それ以上に効率性や功利性が優勢され、心情的結びつきは法的契約関係に押しつけられるという。日本の伝統文化の価値を高く評価する研修生だが、他方、現状の日本の政治にたいしては評価が厳しい。

最近の日本を「欧州では、日本人とはグローバル化した社会の中にあつてもっとも顕著な協調性のない国家とみられている」と評した。その理由は、常に隣接する複数の国家と常識的な政治対話が出来ない程対立しているのは、グローバル化した国際社会にあつて日本だけ。と、日本が、極めて特異な存在と映るようである。

また、原発問題のように、問題の対処の方向性も出ていないのに、あたかも問題がなかったかのように振舞つてしまつて回りも、地理的に島国である以上に政治的に信頼性の低い孤立した島国なのではないか、という印象を与えているようである。

欧州の人々の見方は、孤立しているのは中国ではなく日本であるという。日本人からすれば大いに意見はあるところだが、欧州からはそう見られているところだ。私がドイツに暮らしていたときの経験からも、かの国のメディアでは、例

なくなたつたとしても力を発揮するためにはどうしたらいいのか、ということを探求する。それが武道で言うところの「強さ」の本質である。